

研究課題：施設高齢者と地域社会の関係性を維持する逆ショートステイの実践

代表研究者：立松麻衣子（奈良教育大学教育学部 准教授）

1. 研究の背景と目的

本研究では、「生活の場」が自宅か施設かに拘らず、高齢者が「地域で暮らしている」という実感を抱けることが重要だと考えている。そして、高齢者がその実感を得るためには、地域において人と人とのつながりを再生したり維持したりする「関係性を支えるケア」が必要だと考えている。しかし、現状では、施設に入所することは慣れ親しんだ生活やコミュニティを失う、つまり、地域での暮らしの継続を諦めることと同義であることが多い。

本研究では、施設高齢者の関係性を支えるという課題に対して、地域や家族の理解・協力を得ながら実践的に取り組む。そして、施設に入所しても地域や家族との関係性を断ち切らないことの意義を追究する。さらに、この取組によってつくられる施設と地域の関係性は、地域の高齢化に向けた地域づくりに対して動く地域力につながることを検証する。

2. 研究方法

本研究は、奈良県特別養護老人ホームN苑との協働により遂行した。平成22年度にN苑のスタッフを中心に地域プロジェクトチームを結成し、地域のなかの高齢者施設のあり方について検討を重ねた。平成24年度、N苑入所者のうち、帰宅願望があり医師から許可が得られた高齢者A氏に一時帰宅をさせる取り組みを、施設と地域との協働によって試行した。一時帰宅（以下「逆ショートステイ」と表記）は、下記の〈逆ショートステイ実施方法〉の1)①～4)⑥の方法で行った。さらに、5)⑦によって、逆ショートステイで作られる施設と地域の関係性が地域力につながることを検証した。

平成25年10月～平成26年9月末までの本研究助成期間には、高齢者A氏の逆ショートステイの繰り返し（方法④⑤⑥）と地域力の検証（方法⑦）、新たな逆ショートステイ実施者の選定（方法①②③）と実践（方法④⑤⑥）を行った。その結果、宿泊を伴う一時帰宅8事例と、日帰りの一時帰宅15事例の計23事例の逆ショートステイを実践できた。

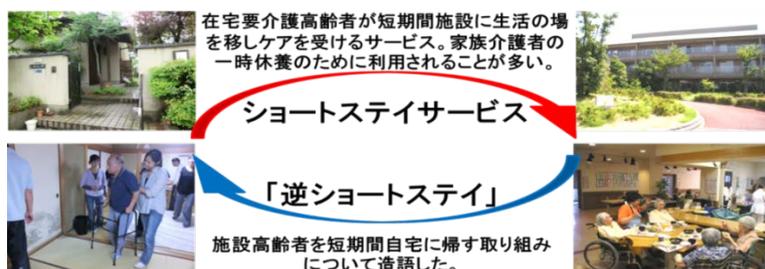


図1. 「逆ショートステイ」イメージ図

〈逆ショートステイ実施方法〉

1) 逆ショートステイ対象者の選定

- ①施設高齢者の中から、一時帰宅の希望があり、それが可能な高齢者を選定する。
- ②その高齢者が入所前に参加していた地域活動や維持したい人間関係等を把握する。

2) 逆ショートステイを受け入れるための地域の体制づくり

- ③高齢者の家族や自宅の近隣住民、②に関係する人々に対して、逆ショートステイの実施方法やリスクについて話し合いを重ね、安全に実施できる方法を検討する。

3) 逆ショートステイと振り返り

④逆ショートステイを実施する。その際には会合や会食等を企画して、高齢者が③のメンバーと接触できる場面を作るようにする。

⑤事後には、逆ショートステイ実施方法について④に参加したメンバーと検証する。

4) 逆ショートステイの繰り返し

⑥一時帰宅を繰り返す。その度に③④⑤の過程を踏む。

5) 地域づくりに向かう地域力の検証

⑦施設と地域住民が地域の高齢化に向けて話し合う機会を設定する。そして、施設と地域社会の関係性が地域力のある地域づくりにつながる可能性を追究する。

3. 結果

平成25年10月～平成26年9月末に実践した逆ショートステイ23事例の、＜年齢、性別、要介護度、入所年月、逆ショートステイの場所、逆ショートステイの受入者、逆ショートステイでの宿泊の有無、逆ショートステイの回数、概要＞を表1に記す。

3.1. 施設高齢者への効果

家に帰りたい、家族と過ごしたいという願いに応えるだけではなく、思い出の場所へ帰ることや (No.6、7)、兄弟姉妹に会う (No.8、19)、気になっていることをする (No.10、18、20、21、22、23)、結婚式に出席する (No.1) など、逆ショートステイは施設入所で生活を諦めさせない支援につながっている。また、地域の協力を得て逆ショートステイを実施することも本人の願いに応える支援につながっている (事例No.1、7、10)。

認知症状がない人の場合、逆ショートステイによって、家族にいつでも会える安心感を持って施設での生活を送っているケースがある。また、重度の認知症の人の場合、逆ショートステイを繰り返すうちに、帰宅時に、今まで思い出せなかったことを思い出したり、昔食べていたものの話が出てきたり、友人等の人間関係の話が出てきたりしているケースがある。さらに、入所当初は施設の生活を受け入れられずに認知症状が悪化したが、家族が施設に來たり一緒に食事をしたりすることで、徐々に安定しているケースもある (No.17)。

3.2. 家族の意識の変化

逆ショートステイによって、家族の「入所すると外出も外泊もできない」という認識が変わり、施設に來て一緒に食事をしたり (No.12、17)、高齢者と外食をしたり (No.17、19、23)、買い物やドライブをしたりすることが繰り返されるようになっていく。また、家族の意識が「施設がやってくれる」から「家族ができることはする」へ変化したり (No.7)、家族が施設で演奏会を開催したケースもある (No.14)。入所させることへの罪悪感が低減したり (No.2、13、14)、家族関係の修復につながったケースもある (No.5)。

3.3. 地域への効果

事例No.1の逆ショートステイは地域住民に受け入れてもらう方法で実施した。逆ショートステイを重ねるうちに、地域住民がNo.1やスタッフに会うために施設に來るようになった。No.1の永眠後にも施設の菜園を管理したり、他の入所者を買い物に連れて行ったりする活動が続いている。地域住民の協力を得て逆ショートステイを実施することによって、地域住民の施設に対する意識を変えることにつながった。

さらに、施設側は、地域住民と関わるうちに、地域には日常生活に困難を抱えている高齢者が多いことを知り、施設が地域高齢者の生活支援（電球の交換や荷物の移動等）を行うようになった（図2）。

施設と地域の関係性ができることで、施設が高齢化する地域の課題を解決して、地域高齢者の地域居住を支えることにつながっている。



図2. 施設が地域を支える

表1. 逆ショートステイ事例一覧（H25年10月-H26年9月末）

事例No.	年齢	性別	要介護度	入所の年月	逆Sの場所		逆Sの受入者	宿泊/日帰	逆S回数	概要
1	78	男	3	H23.4	奈良市	自宅	地域 息子、娘、孫	宿泊	頻繁	地域の受入がある。正月を家族と迎えることや孫の結婚式出席も支援。
2	93	女	5	H26.4	奈良市	自宅	娘	宿泊	13回	ショート利用から入所。施設と自宅を往復する生活の継続。土日帰宅。
3	95	女	1	H26.4	奈良市	自宅	娘、孫	宿泊	5回	娘との同居から入所へ。娘（スタッフ）の家に孫が集まる日に帰宅。
4	86	男	5	H23.2	奈良市	自宅	配偶者	宿泊	3回	週末3泊帰宅していたが胃瘻造設。家族が胃瘻方法を学び、帰宅継続。
5	78	男	2	H26.5	大阪府	自宅	配偶者 息子の配偶者	宿泊	12回	疾病が原因で夫婦関係崩壊。入所と帰宅が関係性を再構築。日月帰宅。
6	82	女	4	H21.5	京都府	自宅	娘、息子、孫 地域	宿泊	3回	正月等家族が集まる時に帰宅。家のトイレが使えるように施設で練習。
7	77	女	5	H17.2	福井県	旅館	娘、地域	宿泊	1回	面会に来る息子・娘と施設との間に相互理解の関係性ができ、帰郷支援。
8	76	女	4	H25.1	宮崎県	兄の家	息子、孫	宿泊	1回	家族と息子が依頼したヘルパーと一緒に、宮崎県に住む兄に会いに行く。
9	85	女	2	H23.2	橿原市	自宅	娘夫婦	日帰	9回	月1回、娘夫婦と住んでいたことがあるところに帰宅し、墓参りもする。
10	83	男	4	H25.2	奈良市	自宅 墓	地域	日帰	7回	入所前にしていた毎月の墓参りを継続。後見人の承諾で家にも立寄る。
11	87	女	3	H25.7	郡山市	自宅	娘夫婦	日帰	6回	家の仏壇が気掛かりな様子を娘に相談。月1回、月命日の帰宅を支援。
12	89	女	5	H24.2	奈良市	自宅	娘夫婦、親戚	日帰	5回	入所時から娘が食事サポートのために頻繁に来る。短時間の帰宅を実施。
13	79	男	4	H26.4	奈良市	自宅	配偶者、娘	日帰	4回	帰宅が可能かどうかの問い合わせが家族からあり、月1回受診時に帰宅。
14	80	女	5	H24.11	奈良市	自宅	娘夫婦、孫	日帰	2回	家族が集まるときに帰宅。孫と娘が施設で演奏会開催を目標にし、実現。
15	85	女	2	H26.4	奈良市	自宅	息子夫婦	日帰	1回	自分のことは自分でできるように心がけた施設生活を送る。退所が目標。
16	104	女	4	H17.2	奈良市	息子の家	息子夫婦	日帰	1回	看取の時期に入り、入所時からの家族と過ごしたいという希望を実現。
17	92	女	3	H26.5	奈良市	外食 買物	娘	日帰	7回	同居していた娘と月に何度か外出をして食事や買物をするのを支援。
18	89	女	5	H23.4	奈良市	宗教拠点	娘	日帰	4回	家族から宗教拠点に連れて行ってあげたい旨の相談があり、参加を支援。
19	102	女	4	H23.3	奈良市	外食	娘、姉妹	日帰	2回	姉妹に会うとのことで、2度、娘の家に帰っている。
20	84	女	3	H20.4	郡山市	墓	姪	日帰	2回	以前は強い帰宅願望があった。今は、家族とともに墓参りをしている。
21	84	女	5	H22.12	奈良市	墓	息子の配偶者	日帰	1回	家族から墓参りに行きたがっているという相談があり、墓参りを支援。
22	84	女	3	H25.7	天理市	墓	娘	日帰	1回	家族は都合が合わず同行できなかったが、配偶者の墓参りを支援。
23	98	女	4	H19.2	大阪府	墓	娘	日帰	1回	墓のことが気掛かりだった。娘2人と墓参り後に外食することを支援。

4. 考察

4.1. 施設と家族との関係性

入所途中よりも、入所時に「入所しても帰れる」ことを家族に説明して、早い段階で家族との関係を作ることが有効だとわかった。家族との関係性が構築されれば、帰宅が難しい場合でも、家族が施設に来ることにつながりやすい。施設が家族との関係を作り、入所しても高齢者と家族との関係を切らない「関係性を支えるケア」につなげる必要がある。

4.2. 共食の機会

地域住民との会食の場を設けることで、地域住民の施設への理解が深まり、協働体制が作れるようになった。また、家族が施設に来て高齢者と一緒に食事をしたり、外食をしたりすることは、家族の施設訪問や高齢者を外出に連れ出すことの理由づけになりやすいことがわかった。高齢者と地域、高齢者と家族の「関係性を支えるケア」の方法や、施設と地域の関係性を構築する方法の一つとして、共食の機会を作る意味は大きい。

4.3. 高齢者と家族の日常生活圏にある施設

入所前の居住地と施設が近くにあると、墓参りなど的高齢者が気になっていることに対して、施設が解決に向けた支援をすることができる。また、家族が高齢者を外出に連れ出しやすい。親族が集まる日に高齢者を帰宅させたり、親族が施設を訪問することも容易になる。高齢者と付き合いのある地域住民が気楽に施設を訪問することもできる。つまり、入所しても高齢者に生活を諦めさせないためには、高齢者や家族の生活圏に施設があることが重要である。また、施設が地域住民に対して生涯学習や就労の場を提供したり、地域の力を貸してもらうためにも、施設が生活圏にあることが重要になる。

4.4. 自宅の居住環境

逆ショートステイ実施後に、施設生活において、帰宅したときに家のトイレを使うための練習を重ねたり、退所が目標になって自分でできることはするという意欲につながったりしているケースがある。一方で、家に介護用ベッドがなく宿泊を伴う帰宅ができないケースもある。逆ショートステイをする場合、現状では居住環境の課題が大きい。

4.5 地域とともにある施設—地域融合—

逆ショートステイを実践した家族介護者が施設でボランティアをするようになり、逆ショートステイで関わった地域組織から会場場所として施設を使わせてほしいという申し出があつたりしている。逆ショートステイによって、施設と家族、施設と地域は、相互理解、相互扶助の関係性へと発展しつつある。つまり、施設が「地域のなかにある施設」になることで、地域に融合して地域資源の一つとして機能できる。

5. 今後の課題

今後、地域と施設の関係性を持続・発展させる方策、および地域コミュニティの再構築と地域づくりの可能性について追究していく。また、逆ショートステイによる高齢者・家族・地域への効果を評価する視点を入れながら分析を重ねていき、施設に入所しても地域や家族との関係性を断ち切らないことの意義をさらに追究していく。

施設高齢者と地域社会の関係性を維持する逆ショートステイの実践

奈良教育大学 立松麻衣子

1

高齢期を地域で暮らす

「生活の場」	サービスを受ける場所	暮らしの場、その実感
① 自宅(自立)	—	地域
② 自宅(要介護)	自宅 施設	地域
③ 施設(要介護)	施設	地域

現状では、施設に入所することは、地域での暮らしを諦めることと同義であることが多い。

||
長年大切にしてきた地域生活やコミュニティが失われている。

「地域で暮らしている」という実感を得るためには、地域で人とのつながりを再生したり維持したりする「関係性を支える」ケアが必要。

2

研究目的

「施設高齢者の関係性を支える」という課題に対して、地域の理解・協力を得ながら実践的に取り組む。

○施設に入所しても地域や家族との関係を切らないことの意義を追究する。

○この取組によってつくられる施設と地域の関係性は、地域力につながることを検証する。

3

研究方法

施設高齢者の一時帰宅（「逆ショートステイ」）を、施設と地域の協働によって実践する。

在宅要介護高齢者が短期間施設に生活の場を移しケアを受けるサービス。家族介護者の一時休養のために利用されることが多い。



ショートステイ

「逆ショートステイ」



施設高齢者の一時帰宅について造語した。

4

逆ショートステイ実施方法

1) 逆ショートステイ対象者の選定

- ①施設高齢者の中から、一時帰宅が可能な高齢者を選定する。
- ②その高齢者が入所前に参加していた地域活動や維持したい人間関係等を把握する。

2) 逆ショートステイを受け入れるための地域の体制づくり

- ③高齢者の自宅の近隣住民や②に関係する人々を交えて、逆ショートステイの実施方法やリスクについて話し合いを重ね、安全に実施できる方法を検討する。

3) 逆ショートステイと振り返り

- ④逆ショートステイを実施する。その際に、会合や会食等を企画して、高齢者が③のメンバーと接触できる場面を作る。
- ⑤事後には、逆ショートステイ実施方法について④のメンバーと検証。

4) 逆ショートステイの繰り返し

- ⑥一時帰宅を繰り返す。その度に③④⑤の過程を踏む。

5) 地域力の検証

- ⑦施設と地域住民が地域の高齢化に向けて話し合う機会を設定し、施設と地域の関係性が地域力のある地域づくりにつながる可能性を追究。

5

逆ショートステイ実施事例

○平成25年10月～平成26年9月末

○23事例の逆ショートステイを実施

宿泊…… 8例（事例No1 - No8）

県内 4例、県外 4例

自宅 6例、その他 2例

日帰り……15例（事例No9 - No23）

県内14例、県外 1例

自宅 7例、その他 8例

6

逆ショートステイ事例No1

- 70代男性
- 奈良市のニュータウンで独居生活をしていた。
- 別居子に長男、長女、次女がいる。
- 下肢の障がいにより独居生活が難しくなり、平成23年に特別養護老人ホームに入所した。

7

事例No1の逆ショートステイ略歴

年月日	内容1	参加者	実践からの波及
H24.4/7	公園で花見	本人・地域住民・スタッフ	●隣人が事例No1宅を掃除をするスタッフに声を掛け、逆ショートステイ1回(6/16)に老人会総会を事例No1宅で開催することが決まる。
5/7	自宅の掃除	スタッフ	
5/18	自宅の掃除	スタッフ	
6/16～17	逆ショートステイ	本人・地域住民・スタッフ	
8/25～26	逆ショートステイ	本人・地域住民・スタッフ	●1週間に5、6日、自宅でお茶を飲んだり、昼食をとったりする。(本人とスタッフ)
12/1～2	逆ショートステイ	本人・地域住民・スタッフ	
H25 11月	入院		●疎遠になっていた家族との関係が新たに築かれる。
12/14～15	逆ショートステイ	本人・地域住民・スタッフ	
H26. 1/ 3～4	逆ショートステイ	本人・別居家族	
2月	孫の結婚式(大阪)	本人・親族・その他	●地域住民が施設を訪問するようになる。
	逆ショートステイ	本人・別居家族	
3/19	永眠		●事例No1が亡くなった後も、地域住民の施設訪問が続いている。
4/5	偲ぶ会	地域住民・スタッフ	

8

平成25年12月14日～15日（1泊2日）

- 地域住民との忘年会を開催。
- 3日前から「もう帰ろうか。」
- 前日までに、自宅の掃除をするために一時帰宅。
「誰を呼ぼうか」「料理は何が良いか」。
客人を自宅でもてなす準備を考える。
- 当日は、終始スタッフにも気遣いをする。

- 地域とのつながりを維持できるように支える
＝地域に出番や居場所をつくる。

9

平成26年1月3日～4日（1泊2日）

- 息子1名、娘2名、孫3名とその他家族1名の計7名が集まり、正月を家族と過ごす。
- おせち料理を食べる表情が、施設と自宅では異なる。
- 施設で家族と過ごす様子と、自宅で家族と過ごす様子も異なる。

- 高齢者の「生活の場」は、空間と人間関係の両方から考えなければいけない。
- 日本には、暦の節目に「家」を中心とした様々な文化がある。生活文化を支えることもケア。

10

事例No1の逆ショートステイでできた 高齢者と地域の関係性

- 地域には受け入れる力がある
- 「いったん特養に入ると、最期まで自宅には帰れない」
「特養に入ると地域との関係が切れる」
これは覆すことができる。
- 「施設では入居者の1人」
「自宅では主人」
立場のギャップを埋めれる。（アイデンティティの再確認）

11

事例No1の逆ショートステイでできた 施設と地域の関係性

- 事例No1の永眠後も地域住民が施設に来る。
- 地域住民が市場開催のチラシを持ち込み、入所者数名と一緒に買い物に行くこともある。
- 施設は、地域住民と関わるうちに、地域には生活に困難を抱えている高齢者が多いことを知る。
→施設が生活支援をするようになった。

施設と地域の関係性ができることで、施設が地域の
高齢者の地域居住を支えることにつながっている。

12

逆ショートステイ、その他のエピソード

○事例No.1「叶うとは思わなかった」

孫の結婚式(大阪)に出席

○事例No.6「一番思い出のある自宅」

一時帰宅を繰り返す。帰宅時に家のトイレを使えるように、施設では自立にこだわるようになった。

○事例No.23「娘との食事」

施設の友達も一緒に外食に行くことがあるようになった。

○事例No.7「ずっと帰りたい故郷」

1年前からの帰郷計画が本人の楽しみや生きがいに。家族の意識が、感謝から「家族もできることはします。」へ。

○事例No.10、20、21、22、23「ずっと気になっていた」

お墓参り。

13

逆ショートステイの施設高齢者への効果

- ・施設に入っても**地域に出番や居場所**を作ることができる。
- ・**施設生活が変化**する可能性がある。
(帰宅の楽しみや目標が、生活自立を促したり生きがいに。)
(家族にいつでも会える安心感が安定した精神状態へ。)
- ・「入居者の1人」→「〇〇」 **立場のギャップを埋める**ことができる。
- ・穏やかな気持ちや**生活を取り戻す**ことができる。
(認知症の方の事例で、一時帰宅を繰り返すうちに、昔の食事の話や友人の話が出てくるようになった。)

↓↓↓↓↓

逆ショートステイは、地域や家族との関係を切らない、生活を諦めさせないことができる。

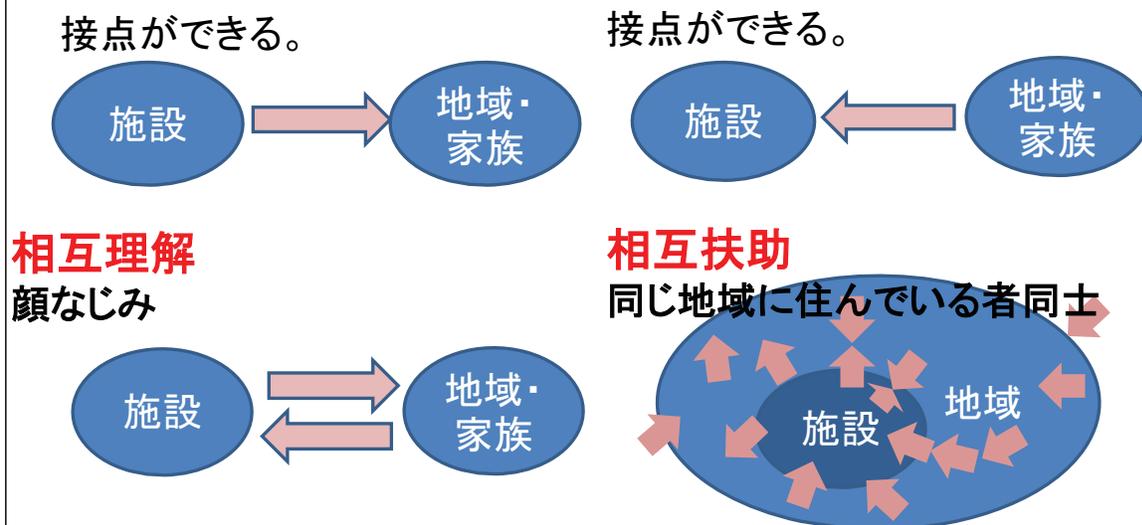
14

「地域や家族との関係を切らない」 「生活を諦めさせない」ために大切なこと

- 施設と家族の関係性
- 共食の機会
 - 家族との食事
 - 地域住民との食事
- 高齢者の日常生活圏に施設がある
(高齢者が住んでいた地域と、施設がある地域が同じエリア)
 - 高齢者の地域生活の継続
 - 施設と地域の関係の深化
 - 帰宅形態と帰宅場所をフレキシブルに
- 居宅環境整備
- 地域とともにある施設 ー地域融合ー

15

地域とともにある施設 ー地域融合ー



施設が地域に対して**地域で一緒に暮らすこと**を目指して働きかけ、**施設が地域とともに歩むこと**で、地域のなかにある施設へ。
施設は地域に融合して**地域資源**の一つとして機能できる。

16

今後の課題

逆ショートステイで得られた効果を追究

①地域と施設の関係性の持続・発展

- ・・・地域高齢者が施設で就労やボランティアの機会を得ることができるように発展させたい。
施設が地域高齢者の生活をサポートできるように発展させていきたい。

②地域コミュニティの再構築と地域づくり

- ・・・この取組によってつくられる施設と地域の関係性は、地域の高齢化に向けて地域課題の解決に向けて動き出す可能性がある。